独創的思考のすゝめ

上巻　日本人はいかに思考力を失ったか

加藤　雅

序章　要旨と構成

全体要旨

人間は考へる葦だそうです。人間には、ものを考へる能力があるので、素晴らしい文明を築くことができ、おかげで私達は豊かで幸せな毎日を送ることができていることになっています。

たしかに、平成のはじめの頃までは、何の疑いもなく、そう信じることができました。でも、平成に入って間もなくバブルがはじけた頃からは、だいぶ雲行きが怪しくなってきました。人間が考へ出した素晴らしい科学技術が、絶え間なく文明を進歩させ続けていくと単純に信じられる人は、今では少なくなりました。人類の英知を結集して作り出されたとされる、科学技術、市場経済、民主政治などの仕組みは、必ずしもみんなの幸せを約束するものだとは信じられなくなりました。私達はどこかで何かを間違えてしまったのでしょうか。それとも、やっぱり人間は考へる葦ではなかったのでしょうか。

私は人間には、ものを考へる無限の力が備わっている、と信じています。ただ、その力が十分には発揮されてはいないだけだ、と考へています。だとしたら、人がものを考へるのを妨げているものを、できるだけ取り除くことが大事になります。何がものを考へることを妨げているのでしょうか。

妨げているのは「時代」です。人は、周りのみんなが「良いこと、正しいこと」と言うことに逆らって、ものを考へることはなかなかできません。科学の進歩は素晴らしい、経済成長は良いことだ、人口が増えることは良いことだ・減ることは悪いことだ、男女差別は悪いことだ、自分の意見を持つのは良いことだ、論証されたことは真実である、などです。みんなが「女は出しゃばるな」と言っている「時代」に、男女差別は悪いことだと考へるのは難しいことです。その逆もまた同様です。昔は男

尊女卑だったけど今は間違いが正されて男女平等になった、というのも同じです。昔より今のほうが「正しい」とみんなが言う「時代」（進歩主義の時代）に従って、そう考へているだけのことです。ものを考へて何らかの結論を出すとします。その結論は「前提条件」によって違ってきます。ものを考へる上での「前提条件」を、「時代」が暗黙裡に設定しているということです。それにより、ものを考へる幅が制限され、導き出される「結論」も制約を受けます。これでは、自分でものを考へているとは言えません。「時代」に考へさせられ、「時代」に強制された（少なくとも制限された）結論を出しているにすぎません。

その上さらに、みんなが「良いこと、正しいこと」だと言うことは、「時代」とともに変わります。「前提条件」が変わるのですから、当然、結論も変わります。私達は、「時代」に制限され、振り回されて、ものを考へることを余儀なくされています。そこで出される結論が、進学、就職、結婚、出産、住む処、両親や子供との同居、など、人生に大きく関わることもあります。人が幸せになるために、どうすべきかと考へるときも、「時代」に振り回されて結論を出しているのです。ひとりひとりの仕事や会社の事業の判断も同様です。ひいては、国力や国の存亡に関わることまで、「時代」に振り回されて結論を出しています。平成に入って、日本企業が競争力を失い続けているのも、みんなが明るい未来を信じられなくなったのも、「時代」に振り回された結果です。

平成の世では、論理的思考が「良いこと、正しいこと」とされています。これも「時代」が強制しているものです。平成流行の論理的思考とは、「時代」に従って書かれた教科書やみんなが言うことを、無条件に「前提条件」に設定して、結論を導き出すことです。端的に言えば、自分でものを考へない思考法（？）です。論理的思考は思考ではありません。

「前提条件」を自分で設定することを、私はおすゝめします。そうすることで、自分の結論を導き出すことができます。自分でものを考へることができます。自分で「前提条件」を設定するとは、教科

書に書いてあることやみんなが言うことを鵜呑みにするのではなく、何を「前提条件」に設定するのが良いのか、自分で判断することです。暗黙裡に「時代」が設定しようとしている「前提条件」を、自覚的に捉え吟味することです。「時代」を受け入れるのなら、自覚的に受け入れることです。つまり、自分が生きるこの世を自分の目で観て、そこがいったいどんなところなのか、自分で捉えるということです。そうやって、自分独自の「前提条件」を設定して結論を導き出します。これを私は「独創的思考」と呼んでいます。

独創的思考を身に付けることで、自分の人生を生きることができます。仕事や事業を進めるなかで決断が必要になったとき、自分で考へ、自分で判断することができるようになります。

独創的思考をおすゝめします。

全体の構成

本書は、ものを考へる力を高める試みです。

ものを考へる力を高めるためには、考へることを妨げているものを、できるだけ取り除くことが一番大事です。ものを考へることを妨げているもののなかでも、一番大きなものは「時代」です。今という時代が許す方向から外れて、人はものを考へることができません。自由にものを考へるなどとよく言いますが、そんなことは不可能です。ものを考へる上で人が出来得る最大のことは、時代が何をどう考へることを強制しているのか、その方向を可能な限り把握することです。そうすることで、その強制力を多少なりとも和らげたり、あるいは、意識的に喜んで時代の強制を受け入れたりすることができます。「上巻　日本人はいかに思考力を失ったか」は、「時代の強制力」の方向が移り変わる様を把握しようとする試みです。

歴史的に人口と経済規模は、急激に成長する時期とほぼ横這いで推移する時期とを、交互に繰り返してきました。まず、人口と経済規模の「成長期」と「横這い期」とで、「時代」を大きく区分します。これに加えて、戦後に特有の「世代交替」の枠組みを使います。このふたつの枠組みで区分される「時代」によって、「時代の強制力」の方向が特徴的に異なるからです。区分を越えると強制力は方向を変え、みんなが「良いこと、正しいこと」だと言うことが変わっていきます。

平成終盤の今は、成長期終了直後です。成長期に特有の考へ方と、それとは正反対の横這い期に特有の考へ方とが混在して、みんなの思考が混乱している時期です。さらに、戦後三〇年程度の間に産まれた「戦後世代」が、この混乱に拍車をかけています。

思考が混乱するこの現象を、人が働くということを例に挙げて、具体的に詳らかにしようとするのが「中巻　日本企業はいかに競争力を失ったか」です。この文脈に沿うならば、経営戦略とは「相反するふたつの考へ方による混乱を治めて、みんなの働きの成果を大きくすること」と観ることができます。

消費者や社員の意識など、事業環境を構成する要素は、この思考の混乱の影響を受けています。経営戦略を考へる経営者や私自身も影響されています。経営戦略を専門とする私は、クライアント企業の戦略を考へるために、時代が強いている思考の混乱状況を、把握する必要に迫られたというわけです。

世の中が「成長期」を過ぎて、どこの国の企業の成長力も、全体的に弱まりました。世の中が「横這い期」へと向かう「移行期」にあるなか、日本企業はこの変化に上手く対応できていません。企業経営者や政府幹部などの指導者層が「戦後世代」になったからです。この世代の人達は、変化への対応を考へるのに最もふさわしくない方向に、思考が固定されてしまっているからです。

移行期の混乱状態のなか、上手く切り抜けるための方法を、中巻の最後に提案します。そうして経営コンサルタントの使命を果たそうという寸法です。

「下巻　思考力を取り戻す」では、「ものを考へるとは何をどうすることなのか」を、ズバリ明らかにすることに挑戦します。

ものを考へるとはどういうことなのか。それがわかると、「時代の強制力」は、何をどう縛っているのかがわかります。そうすることで、自分の考への、どこが、なぜ、どのように、制限され、歪められているのかわかります。自分は、ほとんどものを考へてはいないことがわかります。また、自由にものを考へるなどということは、不可能だということもわかります。

それを自覚すると、ものを考へ始めることができるようになります。自分の考へを改めることができます。ときには、喜んで「時代の強制力」を受け入れたり、喜んで「時代の強制力」に身を委ねて思考停止したりすることができるようになります。たぶん、それが本当の「自由」ということなのだと思います。

下巻の最後には、肝腎の「ものを考へる力自体を高めるにはどうすればいいのか」についてお話します。

「上巻　日本人はいかに思考力を失ったか」の要旨

ものを考へる力を高めるためには、考へる妨げとなっているものを可能な限り取り除くことが一番大切です。最大の障害は「時代」です。みんなは自分が生きている「時代」に沿った方向でしか、ものを考へることができません。

日本も世界のほかの地域も歴史的に、人口と経済規模が百年程度の間に何倍にも増える「成長期」と、数百年続く「横這い期」とが、交互に何度も繰り返してきました。有史以来三回です。日本のこれまでの成長期を挙げると、飛鳥時代前後の「律令国家の成立」、戦国から江戸初期の「幕藩体制の確立」、そして、幕末から昭和にかけての「工業化社会の出現」です。それ以前の、考古学により多少なりともわかっている成長期は、旧石器時代の「狩猟採集文明」と縄文時代の「定住型社会の出現」です。これを合わせれば、最近までの成長期は五回目になります。過去の歴史の大半は横這い期です。たまに訪れる成長期は、百年程度と短い「歴史上の特異点」です。

このような歴史の中で今という時代を捉えると、直近の成長期が終わって四半世紀が経ったところです。つまり、今は「成長期終了直後」にふさわしいことを、ふさわしい方向でものを考へるよう、時代が強制しているということです。平成終盤の今の世の中では、成長期に特有の考へ方が徐々に疑われるようになり、横這い期の考へ方がみんなの心に忍び込み始めています。世の中は横這い期への「移行期」に入りました。

人の「意識」は時代の変化に遅れ、「無意識」は時代変化に同期します。このため、横這い期への移行期には、成長期のままでいる意識と、横這い期に移りつつある無意識との間に時差が生じます。正反対のふたつ考へ方が意識と無意識をねじ曲げ、みんなの思考を混乱させます。また、世の中の仕組みは、成長期を過ぎてもしばらくは成長期型のまま維持されます。このため、世の中の仕組みとみんなの無意識とを乖離させるとともに、みんなの意識を時代遅れのまま固定して混乱を長引かせることになります。

さらに、今の日本は、敗戦後という「時代」にもあります。敗戦から三〇年程度の間に生まれた「戦後世代」が特に、敗戦の影響を色濃く受けています。それが結果的に、成長期型からの頭の切り替え

を難しくしています。本人達のものを考へる力を損なうとともに、みんなの思考の混乱に拍車をかけています。

このような「時代の強制力」を把握することで、自分の思考の偏りや歪みを自覚することができます。そして、自覚した分だけ、「時代の強制力」をかわして、自分でものを考へることができるようになります。

具体的には、今の世を生きるみんなの意識下の思考は、成長期に特有の機械論的自然観と、これに基づく論理的思考に囚われています。これは、横這い期型に向かう無意識と捻れて、みんなの思考を混乱に陥れているだけではありません。機械論的自然観や論理的思考は、それ自体が、極端に偏り、歪み、かつ、自己矛盾を孕んだものです。このため、みんなは、ほとんどものを考へられなくなっています。この呪縛から逃れることが、ものを考へる力を取り戻すための第一歩です。

「中巻　日本企業はいかに競争力を失ったか」の要旨

平成の御代は、日本企業が競争力を失った三〇年として、間もなく幕を閉じます。昭和終盤の一時期、世界中から嫉妬と羨望の眼差しを集めた「日本株式会社」は、平成終盤の今では見る影もありません。

多くの日本企業の成長力が弱まったのは、日本が成長期を過ぎて横這い期に向かっているからです。でも、世界のほかの地域も、多少の時期の前後はありながらも、同様に横這い期へと移行しています。そのなかで日本企業が概して競争力を失ったのは、成長期から横這い期への移行期を、うまく切り抜けられていないからです。

移行期にある日本で「人が働く」ということを、「成長期と横這い期の対比」の枠組みで捉えてみます。人が働く根源的な理由は、生きるためです。自分が生きるのに必要なものを、自分ひとりで全て

揃えることは事実上できません。人が働くときには、多かれ少なかれ、ほかの人達と仕事を分担することになります。成長期には分担はとても細かくなり、横這い期には大括りになります。成長期には大勢の「見ず知らずの他人」との分担が中心、横這い期には家族や近所の仲間など「顔見知り」の間の分担が中心、という対比になります。

成長期には、多くの仕事を「見ず知らずの他人」にやってもらう「外注化」が進みます。そして、売り手と買い手、貯蓄と投資が、それぞれ遠く離れ、互いに心が通い合う関係ではなくなります。そこで行われることは「取引」となり、本来は、お互いの仕事を分担し合うことだった、先行投資の元手を融通し合う助け合いだった、ということを忘れてしまいます。つまり、働く目的を忘れてしまいます。また、効率を上げるために、分担されたそれぞれの仕事の規模を大きくしていきます。雇い人と雇われ人との間に上下関係が生まれます。こうして、細分化され組織化された巨大な仕組みのなかの、ごく小さなピースを担当することが、「人が働くこと」になります。巨大な組織や仕組み全体の効率を上げるための理屈が作り出され、みんなはその理屈に従って働くことになります。目的を忘れ、本来助け合っているはずの相手と心を通わせることもなく、感情を押し殺して機械のようになって、理屈通り正確な動作を毎日毎日繰り返します。みんなは人間性を失います。

横這い期に向かう移行期には、それまでの成長期に細分化された分担を、大括りに戻していきます。家族や近所の仲間など「顔見知り」の間で行う仕事が増える「内製化」が進みます。売り手と買い手、貯蓄と投資が、それぞれ距離を縮め、互いに気持ちが通じ合うようになっていきます。仕事は助け合いだという、働く目的をだんだん思い出すようになります。新たに創業する会社は、規模を大きくしようとしないことが増えます。そこで働く人達は、上下ではなく横の関係となり、仲間意識が強くなります。巨大な組織や仕組みを動かす理屈よりも、自分の目で見た現実を優先するようになっていきます。こうして、みんなは人間性を取り戻します。

喩えて言うなら、新規創業したラーメン屋の親父は、成長期には大規模全国チェーンを目指し、横這い期には自分の目の行き届く規模を維持しようとします。成長期のラーメン屋はコスパ（費用対効果）が良く、当たり外れもなさそうですが、本当に旨いラーメンは横這い期のラーメン屋でしか食べられそうにありません。

平成終盤の現在、日本は移行期の序の口に入ったところです。この変化への対応を難しくしている要因に、ふたつの時差があります。

ひとつめは、成長期型の意識と、横這い期型に移り始めた無意識との時差です。職場のみんなは（意識下で）成長期型の理屈をこねて、ものを言ったり、決めたり、したりします。顧客の（無意識層の支配下にある）購買行動と不整合を起こし、企業の競争力を低下させています。

ふたつめは、成長期型の世の中の仕組みと、横這い期型になってきているみんなの無意識下の気持ちです。この時差により、みんなは（無意識のうちに）世の中の仕組みを嫌悪する気持ちを膨らませます。会社では組織の理屈を否定する声（ワーク・ライフ・バランス、ブラック企業、など）が大きくなり、生産性を低下させています。ネットやマスコミを通して企業や政府の指導者への誹謗中傷が激しくなり、企業活動と政府の活動を妨害しています。

こんな難しい時期に、不運にも、日本企業や政府の指導者層は、戦後世代へと交替することになりました。日本企業が競争力を失い始めたのは、平成一桁半ば、ちょうど敗戦から半世紀経った頃です。つまり、戦後世代が企業経営者など世の中の指導者層になったときからです。戦後世代は、戦前・戦中世代に比べて、ものを考へる力が大きく損なわれています。戦後教育が、頭でっかちに理屈ばかりこねる戦後世代を作り上げてしまいました。でも、教育制度の改革は解決策にはなりません。改革を企てるのも戦後世代だからです。実際、改革のたびに更に悪化させ続けています。

戦後世代の次のカワイイ世代（昭和五二年以降に産まれた世代を私はそう名付けました）は、敗戦の悪影響から免れています。戦後教育の嘘くささにもなんとなく気づいているようで、学校の授業や教科書に書いてあることは、この世のものではないお伽噺だと受け止めています。戦後世代に較べて独創的思考力が格段に高く、横這い期へと向かう移行期を、上手く切り抜ける能力を持っています。十数年後には、このカワイイ世代が世の中の指導者層になります。それまでの間、なんとか現状維持以上を目指して、襷を渡せるようにしなくてはなりません。

そのためには、まずは、世の中は既に成長期を過ぎ、横這い期に向かう移行期にある現実を、しっかりと見ることが大事です。そして、具体的には、ふたつのことを提案します。ひとつめは、各自各社が「得意なこと」をすることです。仕事も事業も、本来助け合いであることは、成長期も横這い期も変わりありません。助け合いがみんなにとって最も良い結果を産むのは、それぞれが一番得意なことを分担するときです。ただ、成長期には「得意なこと」は、とてもわかりにくくなります。経済の仕組みが成長期型のままの現在も同様です。これを見つけることが経営戦略の大事な役割です。特に、移行期の今は、一番大事なことだと私は考へています。ふたつめは、カワイイ世代を、まずは顧客として深く理解することです。そこには、無意識層の支配下にある購買行動を理解するヒントが隠されているからです。「顧客を創るマーケティング」が中心になります。

これは、論理的思考だけではできません。成長期にしか通用しない「近代の発想」を越えた、独創的思考が必要になります。

「下巻　思考力を取り戻す」の要旨

敗戦後から平成にかけての日本では、論理的思考が流行しています。ここには、独創性は一切ありません。論理的思考では、間違えさえしなければ、だれがやっても同じ答えにたどり着きます。独自性

が入り込む余地は全くありません。また、正解はあらかじめ決まっています。創造性も皆無です。むしろ、独自性や創造性を少しでも持ち込めば、「誤り」とみなされます。人がものを考へるという行為は独創的な営みだとするならば、論理的思考は思考ではありません。

でも、論理的思考は、経済成長を「良いこと、正しいこと」と考へる時代に、とても良くマッチしています。経済成長のためには効率重視を徹底する必要があります。みんなが機械のように素早く正確に動作するためには、機械のようにものを考へる論理的思考が適しています。ひとりひとりが人間らしく独創性を発揮してものを考へていては、効率を上げることはできません。特に戦後は、経済成長を最優先して、ほかのことは全て切り捨てることが、日本人が従うべき国内外の秩序となりました。この秩序を守るために中心的な役割を担ったのが、戦後教育です。国民からものを考へる力を奪う愚民化政策です。平成終盤の今も、独創性を押さえつけて、ものを考へることをできなくさせる教育政策が続けられています。

戦後教育の論理的思考では、前提条件と根拠が与えられ（与件の設定）、そこから機械的に推論して結論を導出します。このプロセスでは、独創性は一切許されません。では、人の独創性はどこから来るのかと言えば、最初に与件を設定するところです。つまり、与件の設定こそが、独創性を産む行為、則ち、ものを考へることです。戦後教育では、与件設定は教科書が行います。教科書に書いてあることを鵜呑みにして、その通りに暗記します。これをそのまま与件とすれば、「正解」が得られ、成績優秀者となり、各界の指導者層の一員となることが許される仕組みです。

「時代の強制力」は、時代が前提条件を設定することによって生じます。その時代時代に、みんなが「良いこと、正しいこと」だと言うことに合わせることで、みんなと同じ前提条件が設定されます。たとえ根拠は自分で独自に選んで設定したとしても、そこから導かれる結論は、前提条件により制限されます。横這い期には制限はそれだけですが、成長期には「効率最優先」という、とても強い前提

条件が加わります。この上さらに、戦後の日本では、「教科書に書いてあることに矛盾しないこと」という前提条件が加わっています。ものを考へるなんてことは、ほとんどできない状態です。自分でものを考へるとは、与件を自分で設定することです。新しい考へは、みんなが暗黙のうちに置いている「前提条件」を外して、自分で与件設定することから生まれます。世の中で画期的とか革命的とか言われる考へは、どれもそうして生み出されました。

では、与件はどこからやって来るのか。それは、この世はどんなところなのか、自分で解釈することからです。この世をどう観るか、これを私は世界観と呼んでいます。自分独自の「この世の解釈」です。昭和の頃には「物の見方、考へ方」という言い回しがありました。ものを観ることが則ち、ものを考へることです。自分の世界観を持つことが則ち、自分の考へを持つことです。

戦後から平成にかけての時代を生きている人は、教科書の背後にある世界観を、強制的に植え付けられています。自分の世界観を持つことは許されません。そして、その教科書は、機械論的自然観とそれに基づく論理的思考に従って書かれています。

ものを考へる力を高めるためには、学校で習ったことを鵜呑みにせず、機械論的自然観や論理的思考の呪縛から逃れることです。学校で習った理屈やみんなが言う理屈に盲目的に従うのではなく、自分の目でこの世の現実を観ることです。理屈ではなく、現実を優先させることです。そうやって、自分の世界観に基づいてものを考へることを、私は「独創的思考」と呼んでいます。独創的思考こそが、ものを考へることです。

自分の世界観を深め、豊かにすることで、ものを考へる力を高めることができます。そのためには、この世を「観る」力を高めることです。ものを「観る」とは、記憶をたどりながらものを捉えることです。記憶と把握です。記憶をたどる力を高めてくれるのは、周りのみんなと共有する思ひ出です。民族の思ひ出が国史です。ものを捉える力を高めてくれるのは、母親を始めとする周りの大人に教わ

る言葉です。民族のものの捉え方が国語です。このふたつの力が本来の教養です。成長期にありながらも戦前は、国史と国語の教養教育が重視されていました。残念ながら戦後は、教養教育は排除され、愚民化政策に切り替えられてしまいました。戦後教育にも国語という同じ名前の科目がありますが、本来の国語とは全くの別物です。むしろ本来の国語を破壊する「国語教育」が行われています。日本史も国史とは全くの別物です。関ヶ原の合戦が西暦一六〇〇年だったなんて、当時の西軍の人も東軍の人もだれも知りません。思ひ出の共有なんてできるはずがありません。戦後世代が指導者層になったら日本企業の競争力が落ちたのは、当然の結果です。

今後、横這い期へと向かっていく世の中では、効率重視の前提条件を、少しずつ外していくことができるようになります。独創的思考がしやすくなります。独創的思考ができれば、仕事を含めた暮らし全般が、より上手くいくようになります。自分が産まれたこの世を、楽しく、面白く、幸せな気持ちで生きていくことができます。自分の世界観を磨いて、ものを考へる力を高めることをおすゝめします。

上巻目次

序章　要旨と構成　三
全体要旨
全体の構成
「上巻　日本人はいかに思考力を失ったか」の要旨
「中巻　日本企業はいかに競争力を失ったか」の要旨
「下巻　思考力を取り戻す」の要旨

第一章　枠組みと構成　二七
枠組み29／流れと構成32／時代の強制力の源35

第二章　平成の世を歴史上の一時代として観る　四一
（一）進歩主義の呪縛　四三
進歩主義43／進歩主義の呪縛から逃れる45／
最初から過去だった過去とかつて未来や現在だった過去46
（二）有史以前の成長期と離脱　四九
狩猟採集文明の出現と終焉49／定住型社会の出現と衰退52

（三）中央集権国家の出現と成長期離脱　五六
灌漑技術が普及して中央集権国家が出現した56／成長期直後の奈良時代後半と平成年間は似ている57
（四）幕藩体制の成立と成長期離脱　六一
肥料革命と幕藩体制の成立61／江戸初期は成長期の成功例63／成長期直後の江戸中期と平成年間の類似性65
（五）工業化社会の出現と成長期離脱　六八
今回の成長期68／食糧増産により人口が倍増した成長期前半70／国内の食糧生産量を大幅に超えて成長した後半71
（六）成長期突入の条件と離脱の条件　七四
成長期突入の条件74／成長期離脱の条件75
第三章　成長期と横這い期　七九
（一）成長期の特徴　八一
成長期は異常期（第三章の構成）81／成長期に設定される「前提条件」82／成長期に「前提条件」を設定するのはとても大勢の「見ず知らずの他人」83

（二）外注・集権と内製・分権　八五
成長期には仕事の外注と集権が異常なほどに進む85／
働くという人間の根源的な営みを他人に委ねてしまう86／価値判断も外注する88／
横這い期には内製・分権して大事なものを取り戻す90／
「内製・分権」による正常化は昔も今も起きている91
（三）広い世間と狭い世間　九四
広い世間が支配的となる異常な成長期（（三）要旨）94／
広い世間と狭い世間の違い95／重視するものによって世間の広い狭いが決まる96／
フェイク・ニュース97／客観99／現実と空想の区別がつかなくなる102／
正しい国語104／横這い期には狭い世間が中心になる106／
男は頭で考へ女は子宮で考へる108／無限の広がりを持つ横這い期の狭い世間109／
横這い期にはものを考へる力を取り戻す110／創造の力があるのは無意識だけ111
（四）人のあり方　一一三
取り替え可能な人と掛け替えのない存在（（四）要旨）113／
戦後の日本人は個人という身分を与えられた114／
身分を与える「みんな」の範囲が違う117／将来の夢118／有名人120
（五）経済成長自体が異常　一二三
成長信仰は麻薬中毒と同じ123／
経済成長した分だけ幸せの絶対量が増えるわけではない124／
成長期は日本人には耐え難い時期126

（六）人間に戻る横這い期　一二八
異常な成長期を作り出した「前提条件」が外れていく128／効率最重視の「前提条件」が外れる130／人間らしく働く133／与えよ、さらば与えられん134／今と将来と永遠136／国際化とグローバル化137／家族とムラ140／そのほかの横這い期の姿144／欲望の満足と森羅万象の調和146

第四章　私達は如何に思考力を失ったか　一五一
（一）日本はどうして異常な成長期に入ってしまったのか　一五三
ものすごく前向きな話（第四章の構成）153／日本人は出来ることなら成長期に入りたくはなかった154／成長期に入るときの日本人の葛藤157／敗戦と占領がさらに輪をかけた158
（二）成長期の思考のどこがどう異常なのか　一六一
成長期には機械論的自然観に囚われる161／機械論的自然観は致命的な自己矛盾を孕んでいる162／「なぜ」の問いがわからない164／戦後の日本ではものを考へることは許されない165

（三）思考力を失ったことを自覚する　一六八
論理を使って考へるという「前提条件」を外せばいい168／今思考だと思っているものから論理を引けば本当の思考が見えてくる169／わかるということがわからなくなった170／テストで丸をもらえる答えが言えればわかったことにする172／現実よりも理屈を優先するからものを考へられない174／クルマの窓は一カ所だけ開ける177／日本を支えているのは理屈を振り回す人とは別の人達178／平成の世で大流行の改革はいつも失敗ばかり179／成長期には必然的に進歩主義になる181

第五章　移行期の大混乱　一八五

（一）移行期はいつまで続くのか　一八七
移行期は思考の大混乱期187／横這い期への移行を遅らせている三つの理由188／最終的には食糧問題に行き着く190

（二）不安な世の中　一九二
移行期はみんなが不安になる時期192／ひとつ前の移行期の不安は正体がはっきりしていた193／高度成長期の秩序が崩れだした平成前半195／みんなの不安がピークに達している平成後半197／「私善い人ゴッコ」の大流行200

（三）移行期の入り口にさしかかった平成末の世の中　二〇二
みんなの善意と正義が諸悪の根源となってしまう世の中202／いわゆる「医学部不正入試問題」204

第六章　移行期の絡まった糸をほどく　二〇九

（一）日本人は広い世間が苦手　二一一

無意識下にあるみんなの気持ちだけが先行している（第六章の構成）211／日本人はもともと広い世間が苦手213／内向き車座文化の「ムラ社会」215／特に苦手な資本市場216／世界は広すぎて全く見えない218／広い世間を相手にする集権組織と仕組みをみんなで支える219

（二）壮大な分権が無秩序に始まった　二二〇

「善意の素人」は絶対権力者となり始めた220／中央集権の組織や仕組みを嫌悪するところに権力が移動し始めた221／成長期の日本人は中央集権政府に全権を奪われて安心する222／法律を守る日本人224／西洋の社会契約説225／西洋式の統治とは根本的に違う226／日本の分権は中央政府が消滅し統治の概念自体が希薄になること227／今後十数年程度の間は大混乱が続く229／みんなの意識が追いつけば世の中の仕組みも分権が進み騒動も治まる229

（三）気持ちの問題　二三二

「平成の正義」は机上の空論ならぬ感情の空論232／広い世間と狭い世間を取り違えてしまう234／意見も気持ちの問題になった235／「男女平等」の例237／「ワーク・ライフ・バランス」と「ハラスメント」の例239／気持ちを気持ちとして大切にする241

（四）外で働く女の悩み　二四三
全ての働く女はパワハラを受けている（（四）要旨）243／日本経済全体の生産性低下を主婦がパートに出て補っている245／「善意の素人」と政府によるパワハラ246／いわゆる「男女平等」が働く女を苦しめている247／いわゆる「男女平等」という妄言を産み出す源249／昭和の神聖な男の職場251／女がやるとなんでもゴッコ遊びにしてしまう253／平成の「男女平等運動」が目指したものはただの幻想だった255／女は幸せな気持ちを創り出す天才256／気持ちが伝わる狭い世間で働く258／捕手役の仕事を楽しむ259／成長期型の総合職を選ぶ場合の注意点260／横這い期型の総合職を選ぶ場合の注意点261／本物の「男女平等」を実現する方法263／本当に楽しく面白い仕事264

（五）移行期の狂気　二六七
みんなが狂気に取り付かれてしまった（（五）要旨）267／「私善い人ゴッコ」のくだらなさ269／イジメの楽しさ度合いが日本の首相を決める271／今の公開処刑方式は害悪しか産まない273／他人に厳しく自分に優しい人はものを考へることができない276／「平成の正義」それぞれの意味をわかっていない277

（六）なんとなく不安な気持ちの正体　二八二
根本原因は不安282／自分はいったい何者なのかわからない恐怖284／満たされない身分欲求は虚栄心や嫉妬心と混ざ合い悪臭を放っている285／「平成の正義」は主婦感覚での女学生の正義286

第七章　世代交替　二九一

（一）世代交替による時代区分　二九三

日本人らしさ人間らしさを取り戻していく（第七章要旨）293／戦後三世代のめまぐるしい入れ替わりとカワイイ世代への移行（第七章の構成）294／各世代の特徴が世の中の価値観を決定付ける296

（二）各世代に特徴的な価値観　二九八

理屈をこねるのが大好きな団塊の世代298／遊ぶことだけに一生懸命な新人類世代300／人と同じは嫌だと人と同じことを言う団塊ジュニア世代303／日本人らしいカワイイ世代307／カワイイ世代の次もカワイイ世代308

（三）戦後三世代が織り成す世の中の価値観の変遷　三一〇

終戦後しばらくの間は戦前の価値観が残っていた310／成長期のピークと世代交替の枠組みがピッタリ重なり経済大国となった311／享楽的な新人類世代と親世代の戦中派は昭和元禄に酔い痴れた313／反日と非日の団塊親子の組み合わせが日本を壊していった314／横這い期への移行を加速するカワイイ世代315

（四）戦後世代がゆっくりフェイド・アウトしていく　三一九

戦後世代からカワイイ世代への交替から移行期が見えてくる（（四）の構成）319／束縛から解き放たれる319／過剰な自意識がなくなる320／ただ普通に暮らすことができるようになる321／カワイイ世代は狭い世間を生きる323

（五）戦後という時代がもうすぐ終わる
敗戦後の歪んだ自虐趣味325／日常的に繰り返されている洗脳326／
カワイイ世代は母国から生まれた本物の日本人328／帰って来た日本人329

第八章　将来の危機

将来世代が危機に見舞われるかもしれない（第八章要旨）335／
加工貿易を続けるための三つの条件336／自由貿易はいつまで続くか337／
日本の輸出品の競争力338／食糧輸入が継続できるか339／
ヒトの人口調節機能340／この世を楽しむ（上巻の終わりに）341